

<特集>

社会全体にひらかれた読書環境に学ぶ

～ドイツの学校図書館，公共図書館，書店を訪ねて～

初瀬麻未 (八頭町立郡家東小学校／前ハンブルグ日本人学校)

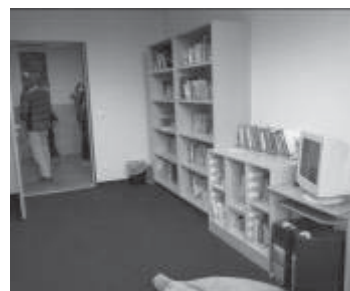
はじめに

日本でもドイツでも，図書館や書店のサービスは充実している。しかし根本的な考え方として，ドイツには社会全体で子どもたちを育てていく土壌がある。子どもに教育を行うのは，学校である前に，まず家庭なのだ。そして，その家庭を支えるのが社会というしくみだ。当然のことかもしれないが，保護者が担っている責任は大きい。ドイツ校では授業が午前中（午後2時頃）で終わるので，家庭や地域で過ごす時間が長いということも，その理由の一つであろう。ドイツ社会全体で子どもたちを育てる環境があり，それぞれが相互に関連しながら子どもたちが本に親しむための場を与えているのではないかと考え，学校図書館，公共図書館，書店を訪ねてみた。

1 学校図書館

(1) 学校図書館

日本では，学校図書館法により，学校図書館はすべての学校に置かなければならないものとされている。しかし，訪問したドイツ校では，日本の図書室のようなものはないように話された。見学した学校には，本が何十冊か置いてある部屋があったが，それは児童生徒に開かれたものではなく，教師の管理のもと教室で使用する場合等に利用される。これはどの教室にもいえることだが，管理上常に部屋には鍵がかかっており，子どもたちだけで利用することはできない。また，この部屋は小さく学習できるようなスペースもなかった。



(写真1) 学校内の図書室

(2) 授業の実際

○場所 Grund und Gemeinschafts schule an der Bek (総合学校)

○対象学年 第1学年，第2学年 ○科目 「Lesen (読み)」

ドイツの学校では，授業内容はそれぞれの教師に任されている部分が大きく，授業のスタイルも各教師によって様々であった。以下に2名の先生の実践を紹介する。

①第2学年の例

< IT機器の活用 >

IT機器が全ての教室に設置してあるこの学校では，インターネットに接続して授業をすることが容易である。教師は，ネット上に紹介されている，「onilo.de」というプログラムを使っていた。



教室前面には，絵と文章が映し出され，子どもたちは，

(写真2) 教室内のようす

交代でその文章を読んでいく。写真2では、一番前に座っている子が、文章を読んでいるところである。次に読む子は、順番に並んで右に座って待っている。教師が交代の指示を出すまで、子どもたちは読み続ける。教師は、子どもたちの実態により、読む長さや時間を調整していた。全員が集中して画面を見ていた。文章を読む子どもは緊張しながら読んでいるようだった。一つのお話を学級全員で読み進めていく楽しさがあるように感じた。

<教室の図書環境>

日本では、図書室と連携して学級に本のコーナーを作ることがあるが、ドイツでは学校に大きな図書室を持たないため、担任の裁量に任されている。この学級の教師は、子どもたちに本を読んでほしいという理由から、教室後ろに本棚を設置し（写真3）、家から自分の本を持ってきて常時本を読むことのできる環境を生み出している。



（写真3）教室の本棚

②第1学年の例

<能力差に応じた課題の提示>

4段階の難易度に応じて、それぞれの本が10冊程度準備されており、子どもは自分で選択して本を読んでいく。いすに座って本を読む子ども、床に寝そべって読む子ども、みんな様々なスタイルで本を読み始めた。1年生なので、文字を獲得した時期によっても、誕生月によっても個人差が大きく、それぞれの力に応じた課題が用意してあることで、自分に合った楽しみ方ができる。また、それを教師が与えるのではなく、子どもたちに選ばせているのもおもしろい。日本では「姿勢をよくして読もう」などと声をかけそうであるが、子どもたちの好きなスタイルでリラックスして読むのも悪くないと感じた。教師は別の活動を指導している中で、子どもたちの自発的な活動となっていた。

<文字と音を一致させる取り組み>

「Lesen（読み）」の学習の中では、文字と音声を一致させる取り組みも行われていた。6人程の人数に教師が1人つき、音を動作化させながら発音させていた。子どもたちは円になって座り、真ん中にカードが並べてある。カードには単語が書かれている。それをめくり、1つひとつの音を動作とともに丁寧に発音し、最後につなげて言う。それが正しければ、カードがもらえるゲームである。文字を獲得するこの時期を丁寧に指導していくことは、日本とよく似ている。これらが基礎となって、自分で本を読むことへとつながっていくと考える。

(3) 教科書

教科書で「読書」がどのように扱われているかを調べることで、教育現場でどのような読書指導がなされているか分かる。ドイツ語の科目には、「Lesen」という科目があり、「読む」ことを専門にした教科書が存在する。他には「書く」「話す」などが別にある。その「読む」分野の中に「読書」という単元がある。その中で「読書」がどのように扱われているか調べた。

①P92 [Bucher, Bucher (本, 本)]

細かいところまで読みましょう

見開き1ページに、ある街角の一場面を載せ、次のような質問をしている。

- ・本を読んでいる人と読んでいない人をさがしましょう。
- ・では、読んでいる人はどこにいますか。



Das Lesebuch3/westerman

学校の図書室の様子である。ソファに寝ながら読んでいる子もいれば、絨毯に寝そべっている子どももいる。さまざまなスタイルで読書に親しんでいる様子が分かる。また、後ろ左には、教師とやり取りをしている様子が描かれている。本棚には、分類を示す表示がある。右には、3年生の借りた本が、ジャンル別男女別にグラフ化されている。

上のような質問をすることで、本を読む活動に注目させている。日常の中で本を読むことを意識させることで、自分自身の読書活動の幅を広げ、日常において本を読むことを勧めている。平成23年度から使用している日本の国語の教科書6年生(光村)にも、「あなたが読書をするのはどんなときですか」というページが設けられ、同じような構成で読書を意識させている。



Das Lesebuch2/Schrodedel 社

②P94 [küchendienst]

話の筋の中心が分かっているか質問をし、話を再現させることで、その話を理解しているかどうか教師は判断している。話を再現するために、内容を分かろうとしながら読む姿勢が生まれる。ただ聞くだけでなく、お話をより深く理解することができると感じた。このような取り組みは、朝の読書や読み聞かせなどでも活かせる。

③P95 [Das schönste Ei der Welt / Helme Heine]

ハイネ (Helme Heine) の作品を紹介し、そのあと2ページにわたって作者紹介をしている。子どもからの質問に答える形になっており、子どもたちが作者に興味を持つように工夫している。日本の教科書にも、同じ作者の作品を読むページはあるが、作者そのものに焦点を当てているものは少ないように感じている。読書の幅を広げていくうえでも、効果的ではなかろうか。図書室掲示などでも取り入れたい。

④P102 [Ideenkiste : アイデアの小箱] Lesetipps/読みのヒント

自分のお気に入りの本を紹介している。表紙の画像をつけている。

「あなたも自分のお気に入りの本を紹介してみよう」

「クラスの本棚から好きな本を選んで壁新聞にまとめよう」

日本と同じような方法で本に興味を持たせる工夫をしている。見開き1ページに4冊の本が紹介されているが、その最後に「自分でも紹介してみよう」と活動を投げかけている。

⑤P88 [Lesespaße mit ANTOLIN : ANTOLINで読書を楽しもう]

○ANTOLINとは何か？

オンラインで、クラスの読書をサポートする。本を読んだあと、子どもたちにクイズを出す。これを活用することで、子どもたちを自発的な読書に導くことができる。午後の時間を有意義な読書につないでいくこともできる。この読書の力は、子どもたちの読む能力にいい影響を与える。多くの知的な能力に直接働きかけ、相互作用を生み出す。ANTOLINは、子ども



たちが様々な想像力を働かせ、読書を通して様々な経験をすることを目的にしている。自分の日常生活がありながら、読書を通して別の世界が体験できるのが読書のよいところである。ANTOLINは、その活動を援助している。

○費用

1クラス当たり：年間39ユーロ 1校当たり：年間179ユーロ

○小学校と連携した取り組み

- ・サイトにアクセスすると、ドイツ語や英語、フランス語、スペイン語、トルコ語で本の読解力を試す質問を子どもたちにすることができる。
- ・1～4年生には教科書に沿った質問もする。教師はそれを活用することができる。
- ・小説、漫画、詩、ニュース、小説、ゲームのルールなど別のカテゴリーからも質問される。
- ・クラスと個々の統計的な読書に関する分析を行い、子どもたちの読書を発展させるような助言を行っている。また、それを印刷することもできる。
- ・子どもたちが興味を持てるように、おすすめの本を紹介している。
- ・家庭でも定期的に両親と一緒に読書するように推進している。

2 公共図書館

(1) 公共図書館のしくみについて

①児童書コーナー

ドイツの図書館では、図書館で本を借りるのに利用料が必要である。年齢によって料金が異なる。また期限までに返さず延滞した場合も、延滞料を支払わなければならない。料金設定は、1年間と半年間であり口座振替にすると割引されるしくみになっている。

表1 利用料金の例

	0～17歳	18～26歳	27歳
標準	5.00€(なし)	15.00€(9.00・)	40.00€(27.00・)
プレミアム	8.00€(なし)	20.00€(13.00・)	45.00€(30.00・)

表2 貸出期間の例

メディアタイプ	期間
本, 雑誌, テープ, ゲーム, CD, CD-ROM, ゲームコンソール	3週間
ビデオ, DVD, 電子メディア	1週間
ベストセラーサービス	14日



(写真4) 図書館内

(2) 具体的な取り組み

ハンブルク市立図書館

① 児童書コーナー

2008年に中央駅近くの利便性のよい場所に設置され、子ども向けに様々なモデル的な取り組みを行っている。本・DVD・ゲーム・読み聞かせCD等、5万もの所蔵がある。幼児向けからヤングアダルト向けの本まで揃えている。またさまざまな国の本を所蔵しており、日本の本も借りることができる長時間楽しく本が読めるように読書環境に工夫が見られる。

② 児童向けの図書活動

- Kibi【Kinder bibliothek Hmburg】プログラム
- 毎週土曜日にイベントを開催
- 読み聞かせ・詩の朗読
- 保育所や学校のためのプログラム
- 個別のプログラム



(写真5) 児童書コーナー

ハルステンベック町立図書館

① 児童書コーナー

明るい図書館。子どもたちの興味のあるものが掲示してある。

本は各分野に整理されて配架してある。

小さな子ども向けの本は、手に取れるように低い位置に置かれている。



②児童向けの図書館活動

- 読み聞かせ（図書館・学校）
- 幼稚園や学校との連携
- 長期休暇中の読書教室の開催
- 他の図書館（シュレスビッヒホルシュタイン州全館）と連携し、本の貸し出しや返却が可能。



読み聞かせ用 CD も貸し出ししている。ドイツでは読むだけでなく、聞く読書も大事にしている。自分では字が読めない子どもたちも、耳からお話を聞き本の世界の楽しさを味わうことができる。多くの本には、読み聞かせ用の CD やカセットテープがついていることが多く、図書館でも借りることが可能である。



読み聞かせのお知らせ

読み聞かせをしているところ。いつも10人程参加しているそうだ。この日は、クリスマスにちなんだお話が語られた。「紙芝居」も人気だそうだ。毎週火曜日14:15~15:00に定期的に行われている。



ケルンの市立図書館

子どもが図書館利用登録をすると、図書館は利用カードや本を持ち帰るための布製バッグとともに1冊のカラフルなノートを手渡される。子どもたちは、読み聞かせの催しに参加するたびに、聞いた物語の絵をノートに描いて図書館員に見せる。図書館員はそれによって、子どもたちが本当に理解したかどうか判断できる。

図書館員の方の話

日本語で書かれたドイツ作家の本を紹介すると、とても喜んでくださった。本をめくる方向が反対であったり、文字が縦向きに書かれていたりするのを発見され、興味深く手に取られていた。そして、「KAMISIBAI」について教えてくださった。まさかドイツに紙芝居があるとは思わなかった。しかも、ドイツ語に訳さないで「KAMISIBAI」と呼ばれている。紙芝居用の木枠も図書室に用意されていた。子どもたちも紙芝居を楽しみにしているそうだ。この図書館には常時保管されている紙芝居はなく、州の検索システムを使って事前に予約し、他の図書館から取り寄せている。紙芝居を取り入れるようになったのは近年のことであるそうだ。日本の文化の良さを認識させてもらう良い機会となった。良いものに価値を見出し、私たちが日本の文化を大切にしていけることが大切だと気づいた。

3 書店

(1) 滞在型の書店

書店の中にカフェが隣接しており、コーヒーを飲みながら本を読むことができる。本を片手に、ソファに座っている人をよく見かけた。また、子どもたちも飽きないで過ごせるように、滑り台や車の模型などが設置されるなど、子ども用のコーナーが作られている書店が多い。このように、長い時間をかけて書店に滞在して、読書を楽しむ環境が書店にある。



(写真6) 書店内

(2) 本以外の品物も豊富

ドイツの書店では、様々なものが売られている。本とともに贈ることができるように、本に登場する主人公のグッズや、チョコレート、季節のものが置いてある。本がいつも身近にある文化が根付いていると感じた。

おわりに

読書をすることで、子どもたちの豊かな情操を育むことができる。日本では、子どもの教育の多くの部分が学校教育に任されている。このようなドイツでの取り組みを生かすことで、日本の図書館教育、特に読書に親しむ領域において、限りある時間を有効に活用しながらより充実させることができると感じた。たとえば読書に親しむ活動をする場合、児童がその本の内容を理解したかどうかを担任が確認をすることがある。そのために教師は、事前に本を読んで内容を理解する必要があり、多くの時間を要する。しかし、オンラインでクラスの読書をサポートするシステムを利用すると、その必要はなくなる。さらに、子どもたちが個人的にホームページにアクセスし、読書を進めることができるので、子ども自身のペースで読書活動ができるのがよい。同じ本を読んだ仲間と情報を共有できるのも利点である。読んだ本に関するクイズに正しく答えると、ポイントがもらえる。これも子どもたちが本をたくさん読もうとする意欲づけとなる。読んでいる本の種類や数等も分析されるため、よりよい読書にするためのアドバイスを子ども自身が受け取れるのもよい。

教師は、子どもたちの読書傾向や読書量をいつでも確認することができるので、指導に役立てることができる。オンラインでホームページにアクセスするという点で不安を感じるかもしれないが、名前と個人に割り当てられたパスワードで管理されているため、大きな心配はないとのことであった。現在の勤務校では機器が充実していないために、教室がインターネットにつながる環境ではないのだが、このようなソフトを導入することで、読書に親しみ広げる活動はさらに充実していくのではないだろうか。学校での取り組みが家庭へとつながり、それが生涯を通じて読書に親しむ習慣へとつながっていけばよいと考える。読書活動を学校だけで行うのではなく、家庭とつながり社会とつながることで、その人の人生をより一層豊かにしていくのではなかろうか。

手をのばせばすぐそばに本がある環境を、これからの子どもたちの生活の中に作ってほしいと願っている。そして、本って楽しいなと感じる機会をわたしたちも積極的に作ってきたい。

